



秋季俳句大会作品集

◆連盟選者特選句

義信選	炎天やおそろしき程空真青	内橋はるみ
かづを選	宇宙より神秘の軌跡星流る	堀地 翠
冬 青選	七夕や復興の文字濃く太く	小幡富貴子
可津志選	遠雷や刻々と潮満ちてくる	高井 富子
置 箔選	あの時のだあれも居ない夏休み	高木 昭夫
こうき選	問はず語りの父の爪切る終戦日	西野津奈子
喜 子選	お手紙も木の実もまじるおもちゃ箱	稗苗 良二
康 裕選	涼新た夫の床踏む音確か	筏井 恵子
久 恵選	野も山も川の流れも秋の音	岩崎 晃嗣
城 子選	だんないと仮設の友の日焼け顔	水野 元雄
ゆう子選	人生の二毛作目へ古茶新茶	高田 勇
弥 生選	宵祭りに連れられて余所見して	室井千鶴子
秀 子選	地震見舞ふその荷の中の一夜酒	石黒 順子
美智子選	人の世に一拍遅き花火かな	神保と志ゆき
洋 子選	ふるさとに長生きをして梅を干す	川上 淑子
直 彦選	絵日記の見開きごとと西瓜割	野村 邦翠
一 子選	芋掘る児指の先まで声にして	尾山勢都子
重 之選	青柿やふと晩学のさみしき日	水野 元雄
桂 子選	正座して黙すのみなり盆の客	馬瀬 和子
恵 子選	芋掘る児指の先まで声にして	尾山勢都子
昭 夫選	ひたすらに雨を吸ひ込む青田かな	倉沢 由美
勇 選	夏籠り八十路の挑む鶴亀算	勝守 征夫
せつ子選	影を踏み踏まれ鎮守に踊の輪	二口わこう
寿 山選	忘れてはならぬ戦災遠花火	板谷野々江
三 久選	まだ籬の怖さを知らず秋の鮎	土田 由朗
平 太選	地震見舞ふその荷の中の一夜酒	石黒 順子
達 哉選	揃へ置く靴に歳月魂迎へ	久崎富美子
睦 子選	身を矯めてきき風に飛び掛かる	加能 雅臣
美知子選	風に聞く季節の流れ夜の秋	久崎富美子
多佳子選	打水の風よびやすし縄暖簾	宮西 昌子
真智子選	苛立ちを扇子を閉じて納めけり	牧野きよ子
幸 子選	百才を目ざす詩かも百日紅	浜谷 栄子

◆入賞句

天 位 10点	水飲んで水飲んで夏逝かしけり	室井千鶴子
地 位 10点	藤椅子の店番凧と百二歳	北川 秀子
人 位 9点	だんないと仮設の友の日焼け顔	水野 元雄
4 位 9点	打水の風よびやすし縄暖簾	宮西 昌子
5 位 8点	芋掘る児指の先まで声にして	尾山勢都子
6 位 7点	絵日記の見開きごとと西瓜割	野村 邦翠
7 位 6点	ふるさとに長生きをして梅を干す	川上 淑子
8 位 5点	離れたるて看とりごろや夕焼雲	四宮 一子
	我が胸に問ふこと多し星月夜	成瀬 輝代
	明日帰る赤子の服を夜濯す	横山 優子
	人間は争いが好き蟻の列	吉田 憲子
	花火待つ吾子は北斗を探してる	坂田 紀枝
	寝転んで鴨居の写真盆帰省	森川 敬三
	網一投夏日の川面きらめかす	新村美那子
	端居せるAIニュース背に聞いて	野中多佳子
	鬼太鼓の汗の衣裳を干す浜辺	浅尾 京子
	転んでもまだ先があり夏野行く	高田 勇
	がらんぼにひとりぼっちを覗かるる	石田 英子
	人の世に一拍遅き花火かな	神保と志ゆき
	遠花火聞いて前髪切っている	川口 順子
	図書館の大窓小窓秋立ちぬ	福島やす子

9 位 4点

炎帝や五輪に沸きしセーヌ川	船平 晩秋
産声を聞いて安堵や遠花火	日合 英子
迷いより抜け出すための夕端居	成瀬 輝代
揃へ置く靴に歳月魂迎へ	久崎富美子
七月や祝儀に使ひ新紙幣	澤田 敏江
つうーかあの卒寿と米寿端居して	澤田 敏江
御仏飯のほどよき高き秋立てり	青木 章子
炎天やおそろしき程空真青	内橋はるみ
昭和の日私も生きた一ページ	丸田美恵子
たてものの曳き手たのまれラグビー部	川上 美佐
干す度に色を濃くする青田かな	藤井 詩耕
豇豆干し物種を干し小商ひ	田上眞知子
いっよりか人はおとなに猫じやらし	神保と志ゆき
日に晒す刺子の野良着百日紅	宮西 昌子
夏草や駅から遠い古戦場	柄沢 恭子
銀漢を恋うて麒麟の首伸びる	久保美智子
旅行地図眺めては閉じ晩夏かな	林 幸子

※ 天位と地位、人位と四位の順は選考委員会協議による

富山県現代俳句協会

定期総会・春季俳句大会（予告）

日時 二〇二五年三月二十三日（日）

開会 十三時

会場 富山県教育文化会館 一階 集会室

令和七年度 夏季吟行俳句大会（予告）

期 日 令和七年七月二十一日（月・海の日）

会 場 南砺市 詳細は未定

吟行地 桜ヶ池周辺

講演要旨



越中時代の家持の《驚異》

高岡市万葉歴史館学芸課長

新谷秀夫

『萬葉集』の中で《越中》に関わる歌を「越中万葉」と呼びならわし、歌数を三三七首と数えています。家持が国守として越中に赴任してきたのは天平一八

(七四六) 年で、天平勝宝三(七五一)年に平城京に戻るまでの五年間を越中過ごしました。

ところで、家持は『萬葉集』を代表する歌人の一人です。この家持が『萬葉集』に残した歌四七三首のうち約半数の二三三首が越中で詠まれています。つまり「越中万葉」三三七首の大半が家持の歌で、「越中万葉」は家持なしでは語ることができません。家持という歌人が越中に赴任してきて、たくさん歌を残した。このことは日本の長い歴史の中のほんの一瞬に過ぎません。しかし、逆にこの事実こそ「万葉のふるさと」の一つとして《越中》、つまり現在の富山県を有名にしています。そのような家持にとっての《越中》の果たした役割について、この短文の中でそのすべてを語ることはできません。そこで、越中時代の家持を

考える上で重要なキーワードを使っその一端を説明してみたいと思います。

馬並めていさうち行かな 洪谿の
清き磯みに 寄する波見に

(巻一七・三九五四)

家持が越中に来て最初に参加した宴席で詠んだ歌です。赴任直後の新しい国守に、誰かが「洪谿」のすばらしさを語ったのでしょう。家持は「いさうち行かな」と宴席にいる人たちを洪谿へと誘っています。洪谿とは、高岡市北部にある、富山湾の美しい風景の一つとして必ず紹介される雨晴海岸のことです。

じつはこの歌こそが、家持が越中の自然をうたった最初の歌なのです。はじめたやうに越中の地、この後たつぷりとその風土を満喫し、多くの名歌を残すこととなる家持も、最初は宴席の出席者から聞いた話でそのすばらしさに感動しています。当時は個人的に旅することがほとんどなかったたので、旅とは特異な状況ということになります。生活圏を越えて、知らない世界(つまり異境)へと出

るのですから、その感慨はまさに「異に驚く」、つまりは《驚異》とともにあったにちがいありません。《越中》は家持にとってまさに異境です。都と異なる越中の風土は、きつと驚きにつながったにちがいないと思います。

その家持が、本格的に越中の風土を歌ったのは《出挙》の職務で越中国内を巡行した天平二〇(七四八)年の春です。おそらく出挙の仕事を行なうために、はじめて越中国内をくまなく巡ることとなった家持は九首の歌を残しています。しかし、まったく仕事の内容や農民の姿を詠んでいません。訪れた土地の、まさに《風土》を詠むばかりです。なぜ家持はこのときの歌を『萬葉集』に残したのか。それはおそらく、まさに《驚異》を記録したいと思ったからでしょう。《雄神河》(現在の庄川上流)の「葦附」(巻一七・四〇二二)や「延槻河」(現在の早月川)の雪解け水の多さ(巻一七・四〇二四)など、まさに越中の《風土》への《驚異》を実際に体験した中で詠まれた歌なのです。

越中の風土を本格的に意識し出した家持は、この後もたくさん歌で《驚異》を記録し続けます。その集大成のような作品群が「越中秀吟」(巻一九・四一三九〜四一五〇)なのです。

国守として初めて赴任した越中での《驚異》体験をあるがままに歌に詠み続けた家持は、越中の《風土》のなかで歌人として大きく成長を遂げました。そして、天平勝宝三年秋に家持は平城京に戻ることとなります。いよいよ出発するにあたって家持は、

しなさかる 越に五年 住み住みて
立ち別れまく 惜しき宵かも

(巻一九・四二五〇)

という歌を残します。越中での生活を十分に楽しみ、本当に「立ち別れまく惜しき」場所と思っていたのでしょうか、それを素直に、越中を離れるのが残念だと詠んでいます。

家持がはじめて地方に赴任した越中の地での五年間、しっかりと《越中の風土》を満喫し、歌人として大きく成長したことは確かです。『萬葉集』を代表する歌人の一人である家持が、歌人として大きく飛躍する上で果たした《越中》の役割は非常に大きいものでした。その点からすれば、《越中万葉》の中心的な舞台である富山県は、まさに「万葉のふるさと」と呼ばれるのにふさわしい場所なのです。

「越の讃歌」(衣)
高点上位入賞作品

復興へ法被の揃ふ祭山車 野村 邦翠
水呑みに来ては踊の帯なほす 荒田眞智子
涼しさや絵解きの僧の黒法衣 新村美那子
夏足袋を小幅に布橋灌頂会 浅野 義信
サンドレス夫の手借りる背のボタン 西野 睦子
花火見の子の帯きつく結びけり 室井千鶴子
真つ直ぐに昭和を生きてセルの父 野中多佳子
夜濯ぎやあふるる水に練習着 飯干ゆかり
甚平や開けつ放しの夕座敷 鈴木 幸雄
浴衣着て舟で来る人湯祭 井上すい子
むぎや節袴揃きや寺の秋 谷口 智子
将棋指す親子甚平着てをりぬ 山西 澄子
地を鳴らす黒の法被や風の盆 成瀬真紀子
子供服買ひ揃へるも盆用意 高田 勇
新涼や野良着のままで読む手紙 二俣れい子

◇受賞

○(公)俳人協会主催第63回全国俳句大会
「一般の部」
大会賞(四句)
新しき楽譜の届く四日かな 荒田眞智子
選者特選句
小川 軽舟選
空き家けふ小さき空き地に夕つばめ 二俣れい子

片山由美子選

新しき楽譜の届く四日かな 荒田眞智子
藤田 直子選
ゆつくりと大人になれよ鯉幟 荒田眞智子
松岡 隆子選
改札を横向きに出る浮輪の子 杉本 恵子
三村 純也選
新しき楽譜の届く四日かな 荒田眞智子
森田純一郎選
雁風呂を焚かねど貝の殻あまた 中島 平太

応募総数 一万一千百八十五句
中坪達哉会長は昨年に続き選者を務めた
「ジュニアの部」
大会賞(十句)
百日のいもうとわらう春の風 高岡市立伏木小学校
三年 高有 彩蘭

奨励賞 高岡市立伏木小学校
応募総数 一万四百四十六句
○(公)日本伝統俳句協会第三十五回全国大会
期日 令和六年九月十四日(土)
会場 軽井沢プリンスホテル・ウエスト
入選句

句屏風の流るる筆の爽やかに 高城 玲子
朝霧や丸飲みされし浅間山 畑中あづき
秋雲を仰ぎて歩む虚子小径 武田 律子
旧街道茅花流しの暮れ残る 北川 秀子
○第二十四回「俳句四季」全国俳句大会
大賞一名

被災地の雪を溶かして米を焚く 安居 雅寿
○北日本新聞社文化功労賞 中坪 達哉
来年で発足五十年となる富山県俳句連
盟五代目会長として、約四百名の会員を
率いる。北日本文芸俳壇選者として、ま
た、今年で創刊百年を迎えた俳誌「辛夷」
を主宰するなど、県内俳壇の発展に尽力

した。

(公)俳人協会富山県支部俳句大会

九月二十三日(月・振替休日)富山電
気ビルにて開催。俳人協会評議員・「ラ
ンブル」主宰上田日差し先生を講師に迎
え講演を聞く。演題は「俳句のポエジ
性―五千石句を中心に―」。投句数
百九十二句、会員六十四名で三句投句。
講師特選

思ひ出に我は消えゆく母の秋 山腰美佐子
背戸へ出て薬のにはひの良夜かな 浅野 義信
ちちる鳴く遠ざかりゆく胡弓の音 明官 雅子
とりどりの和紙の匂へる夜長の灯 野村 邦翠
女狐も混じりておわら風の盆 田代 夏緒
☆互選高ポイント
一位

間引菜をくすぐるやうに洗ひけり 新村美那子
二位
飛石は父の歩幅よ昼ちちろ 野村 邦翠
三位
ちちる鳴く遠ざかりゆく胡弓の音 明官 雅子

令和六年度「辛夷」三賞

辛夷賞 浅尾 京子
中島 平太
衆山皆響賞 水上 玲子
奨励賞 橋本しげこ
永井 淳子

第52回砺波市文化祭俳句大会

十月十二日(土)砺波市文化会館にて
開催。投句数二百十句。投句者七十名。
四十五名参加。

講師

中坪達哉県俳句連盟会長 選
天位

刈田の香夫を誘ひて夜の散歩 西田満寿子
地位

我一人残る写真や秋薔薇 北村加代子
朝蟬や今日為すことを口ずさみ 堀田ふみ子

人位
虫の音に仮面をはずす夕まぐれ 宮田 衛

子に少し気遣わせおり夏の風邪 田村 浩美
稲刈も終り父子のつなぎ干す 小西 とみ

川井城子県俳句連盟幹事 選
天位
余生には広すぎる家秋簾 砂田 春汀

地位
稲刈も終り父子のつなぎ干す 小西 とみ
新盆や妣の着物を並べをり 樋掛もえぎ

人位
天井の木目笑ふや昼寝覚 沖田 泰子
Tシャツの畑より直行墓参り 永井 邦子

まだ死なぬつもり同志の暑氣払ひ 齊藤 孝臣

◇句集出版紹介

「風狂の徒」 太田 硯星 令6・11

編集後記

連盟会報99号をここにお届け致します。
次回100号は令和七年七月一日発行予定
です。会報に関する記事等があれば原
稿用紙に記入の上、左記に送付下さい。
(郵送又はFAXのみ)
〒931-0121 南砺市井波一四八五二六
FAX:TEL 〇六六 八二二九〇八